

滝洞遺跡 II

辰野高等学校第2グラウンド造成に伴う発掘調査報告書

1996

長野県辰野町教育委員会

序

滝洞遺跡は、辰野高等学校テニスコート造成事業に先立って昭和61年に調査が行われて以来、今回が2度目の調査となります。第1次調査では、16世紀の陶磁器を出土した住居址と思われる遺構をはじめ、内耳土器を出土した土坑や柱穴など、主として中世の遺構が発見されています。これは、後年に上の山遺跡の調査を実施する際に、中世の城館跡を想定する大きな資料となりました。残念ながら第1次調査は、調査範囲、方法ともに十分であったとはいえ、期待に応えられるような成果を取ることができたかどうか疑問ではありますが、後につながる調査という点においては非常に貴重な成果であったと思います。

今回、辰野高等学校の第2グラウンドの造成に先立って第1次調査区の西側を調査することとなりました。当初は、天白古城（上の山遺跡）の後背地ということもあり、中世の遺構が出土するのではとの期待もありましたが、試掘調査の結果、残念ながら東西に延びる堀が見つかったのみでした。天白古城は、上伊那十三騎の一人といわれる矢島勘兵衛が居住していたという記録が『伊那温知集』をはじめ、『伊那志略』などにあります。発掘調査の結果からはこのことを裏付ける積極的な根拠は発見できませんでしたが、出土遺物からみると記録の年代ともほぼ一致していることから、矢島氏が居住していた可能性は高いと思われまます。

今回出土した堀は、この天白古城といわれる城館跡の北側から西へ延び、小洞の奥深くまで続いていることが踏査の結果明らかになりました。これは、付近に残された文七屋敷・要害といった地名とともに、中世の何らかの施設がこの付近に存在していたことを暗示する貴重な発見となりました。このことは城館跡の範囲が上の山遺跡のみにとどまらず、もっと広範囲にわたっていることを示していると考えられます。

第2次調査によって出土した遺構数は極めて少なく、あまり目をひくようなものは出土しませんでした。堀の存在を実証できたことは今後の研究にとって大変大きな成果であったといえます。

今後この調査報告書を中世の城館跡の研究資料として活用していただくことを願う次第です。

平成8年3月

辰野町教育委員会
教育長 小澤 幸彦

例 言

1. 本書は辰野高等学校第2グラウンド造成事業に先立って実施された辰野町大字伊那富3592番地他に所在する滝洞遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は辰野町教育委員会が長野県土地開発公社の委託を受けて行った。

発掘調査関係者名簿

1. 滝洞遺跡発掘調査団

調 査 団 長	小澤幸彦（辰野町教育委員会教育長）
調 査 員	福島 永（辰野町教育委員会社会教育課）
発掘調査協力者	大森淑子・長田作衛・垣内諭・唐沢房夫・上島元彦・矢島高
整理作業協力者	大森淑子

目 次

序

例 言

発掘調査関係者名簿

第1章 調査の契機と経過	1
第1節 保護協議の経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地形と地質	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 遺構と遺物	6
第1節 中世の遺構	6
第4章 ま と め	12
写真図版	

第1章 調査の契機と経過

第1節 保護協議の経過

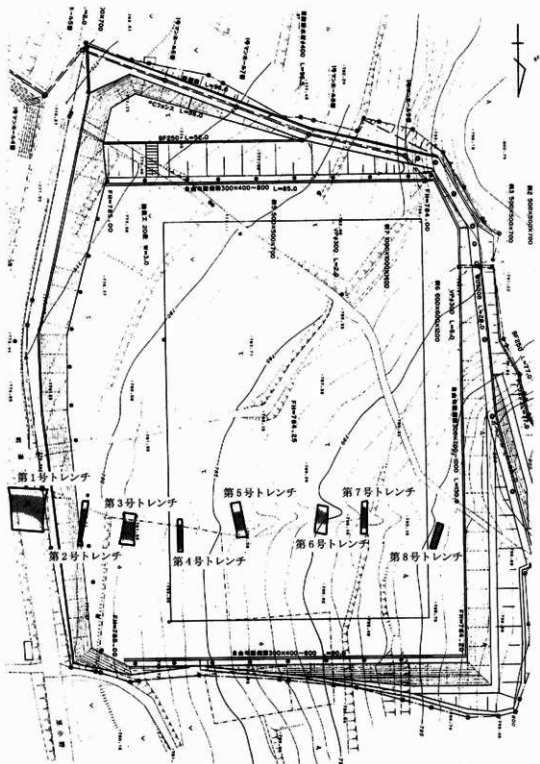
滝洞遺跡は昭和60年にテニスコート造成に先立って調査が実施され、中世の遺構・遺物が出土している。

平成6年11月30日に、辰野高等学校同窓会と長野県教育委員会高校教育課・長野県土地開発公社の要請により、辰野町において関係各課との連絡会が実施された。長野県土地開発公社の司会により、各事業課より造成予定地における問題点が指摘された後で、教育委員会の意見が求められた。ここで、開発面積がおよそ2haにおよび、試掘調査の状況によっては1年間ほどの調査期間がかかる旨の説明をし、開発側が平成8年度工事着工を予定しているのと大きな食い違いが生じた。

同年12月10日に辰野町教育委員会独自に高校教育課・土地開発公社と長野県教育委員会文化課を交えて保護協議を行い、工事の計画説明と現地視察を実施し、この遺跡から中世の城館跡関連の遺構が出土する可能性があること、現在の地形においても開発区域内に堀と思われる部分が含まれ、調査期間についても十分配慮してもらいたい旨の説明を行った。これに対して開発側は一定の理解を示し、遺跡の状況次第では開発計画の見直しも含めて検討するとの回答をし、まずは対象地域全体に試掘調査を実施し、その結果をもとにして再度保護協議を実施することとした。

平成7年3月10日、文化財保護法第57条に基づく届が提出されたのを受けて委託契約を長野県土地開発公社と辰野町の間で結び、試掘調査を実施した。この間、この地区に上水道の本管が埋設されていることが判明し、位置等を問い合わせたが場所の特定に至らず、水道管の捜索もあわせて行うこととなった。このためトレンチによっては十分な調査が実施できず、遺構の把握が十分であったのか、いささか疑問の箇所もあることを付記しておきたい。

以上の経過をふまえての試掘調査の結果、遺構等は発見されず、当初より堀と考えられていた溝についてのみ堀として確認されたので、平成8年2月7日に長野県文化課および高校教育課・土地開発公社と、辰野町教育委員会で保護協議を実施し、堀の部分について部分的に調査を実施することに決定し、3月13日より本調査を開始した。



第1図 調査位置図 (S = 1/1,000)

第2章 位置と環境

第1節 地形と地質

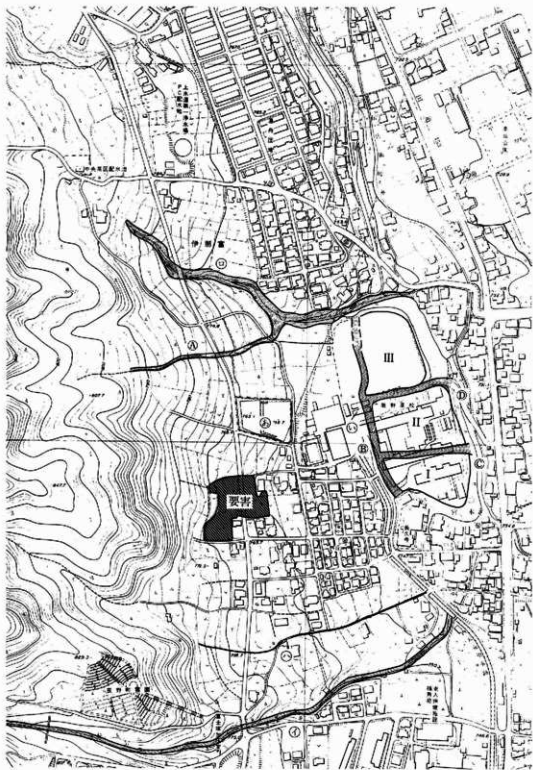
滝洞遺跡は、辰野町の西側の町村境となる^{ニホコ}楡沢山の山麓に形成された複合扇状地上に存在している。この扇状地には楡沢川、滝洞川といった河川があるが、普段は伏流水となっており、ほとんど流水のみられない溜川となっている。しかし降水量の多い時には一気に増水し、現在の宮木区にまで大量の流水があったと伝えられている。

この扇状地と楡沢山の間には断層があり伊那谷断層と呼ばれている。この断層は、北大出区の神明神社西部をとおり、新町区の後山を経て滝洞遺跡西部にいたり、ここから大きく東に向きを変えて大城山へと向かっている。

遺跡の立地する扇状地は、天竜川の支流の一つである横川川によって形成された横川礫層を基盤とし、そこに中期から新期のテフラをのせている。そしてその上に楡沢川、滝洞川によって押し出されてきた堆積物が3m以上も堆積して現在の扇状地を形成し、今なお堆積は続いている。この扇状地は、13°~15°という急な斜面であり、扇端部ではテフラと扇状地堆積物が混じっている。また、この付近は多くの沢によっていくつかの扇状地が形成されているために重なりあい複合扇状地が形成されている地域でもある。



第2図 遺跡位置図 (S = 1/50,000)



第3図 城館跡概念図

第2節 歴史的環境

滝洞遺跡付近には、縄文時代から中世にいたる様々な時代の遺跡が分布している。上の山遺跡(43)は、辰野高校校舎の改築事業に伴っての調査において縄文時代早期の土器片をはじめ、前期の住居址・中期末葉の住居址、中世の城館跡に伴う堀や曲輪がみつまっている。この上の山遺跡は「天白の古城」と江戸時代にはすでに呼ばれており、上伊那十三騎のひとりである矢高勘兵衛が居住したと伝えられている。また、弥生土器の破片も数点出土している。この地区では弥生時代の遺跡の分布がうすいことから注目される遺物といえる。北湯舟A遺跡(225)は県住の改築に先立って調査され縄文時代中期初頭の住居址が出土し、その覆土内より多量の土器が出土していることから、この地域の指標となる遺跡として注目される。

平安時代の遺物はこの付近のほとんどの遺跡で出土している。諏訪神社境内を含む月丘の森遺跡(45)では古くから土師器等が採集されており、その下位段丘に存在する前田遺跡(46)でも昭和40年代初めの辰野西小学校校舎改築時に多くの土器が出土したといわれ、土師器・須恵器であった可能性がある。このように多くの遺跡に平安時代の遺物が出土することは、宮木地域にあったと伝えられている宮処の牧との関連が注目される。

また、この地域は中世の遺跡としては前述のとおり上の山遺跡がまずあげられる。また、滝洞遺跡の南には、要害といわれる小高い部分があり、滝洞遺跡の堀や上の山遺跡の城館跡との関わりが考えられている。また滝洞遺跡からは、竜ヶ崎城・荒神山・小式部城といった記録に残る城館跡などをよく見渡すことができる。



第4図 周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)

第3章 遺構と遺物

第1節 中世の遺構

第1号トレンチ (第5・6図)

調査区が一番東側に設定したトレンチで、堀の南肩部分は、東西に埋設された水道管の掘削により破壊されていた。堀の推定幅は4.5m・深さは最深部で1.6m、最浅部で1.1mを測る。

堀の底部はトレンチ西部に関しては2筋の底部が確認され、この溝が東部にいたって1筋に収束していた。底は砂層で何段にも凹凸が形成されていることから、水が流れていたことが推測された。

堀の北部は、2段のテラスが作りだされており、トレンチの北部に延びている様子が確認された。このテラスの上層には黒色土が堆積しており、カクランによる削平面とは考えられず、堀に関連した遺構と推測される。

第3号トレンチ (第7図)

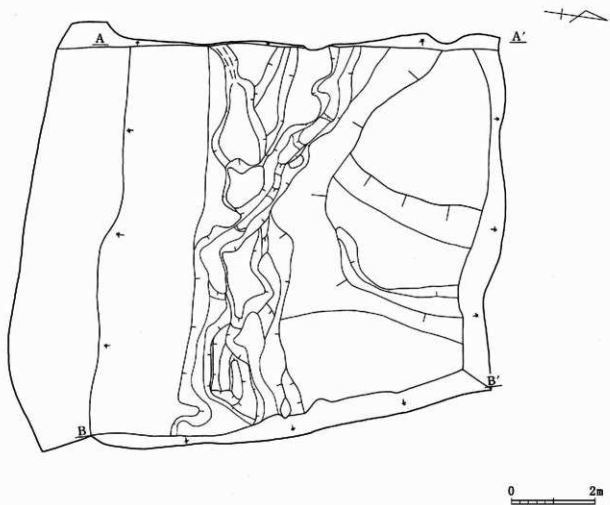
幅4.6m・深さ最深部2m、最浅部1.8mで、底部は平坦で、北部に浅い溝状の筋が検出されている。しかし、断面を見るとこの部分は自然堆積の砂礫層と考えられ、このトレンチで検出された堀の部分については底部は平坦面と考えられる。

第5号トレンチ (第8図)

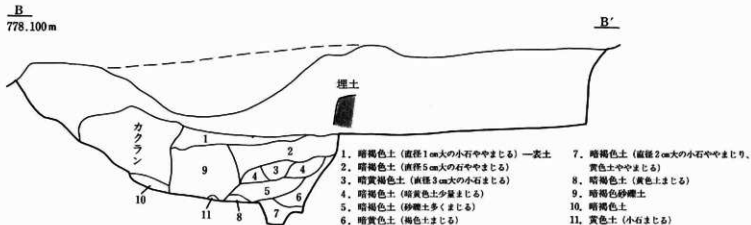
幅3.5m・深さ最深部1.6m、最浅部0.9mで、断面V字状を呈している。堀北部は1段テラスが作られている。底部には砂礫層が堆積しており水が流れていた様子が観察された。

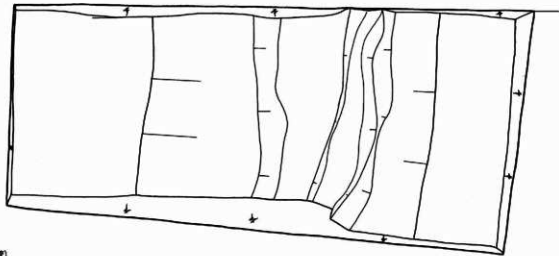
第6号トレンチ (第9図)

幅7m・深さ最深部1.6m、最浅部0.9mで、断面はU字状となっている。底部は蛇行しており、砂礫の堆積も確認されていることから、水が流れていたことが推測される。



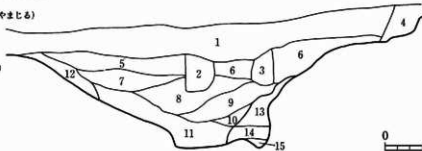
第5図 第1号トレンチ平面図





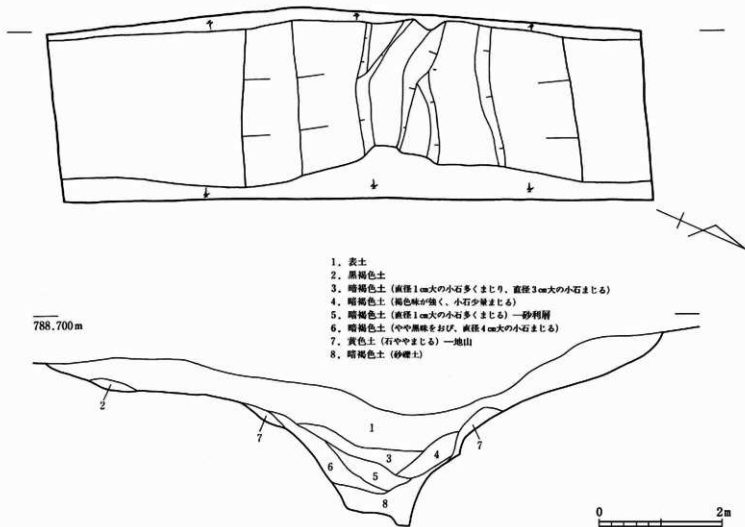
1. 表土
2. カクラン (水道管)
3. 暗褐色土 (暗黄色砂礫土まじる) —カクラン?
4. カクラン
5. 暗褐色土 (直径3cm大の小石まじる)
6. 暗褐色土 (直径2cm大の小石少量まじる)
7. 暗褐色土 (暗褐色砂礫土まじる)
8. 暗褐色土 (直径2cm~5cm大の石多くまじる)
9. 暗褐色土 (黄色味をおび、直径2cm大の小石ややまじる)
10. 暗黄褐色土 (直径2cm大の小石まじる)
11. 暗褐色土 (直径5cm大の石、小石まじる)
12. 暗褐色土 (直径3cm大の小石多くまじる)
13. 暗黄褐色土 (直径5cm大の石、小石少量まじる)
14. 暗褐色砂礫土—地山?
15. 黄色土 (砂礫まじる)

783.700m

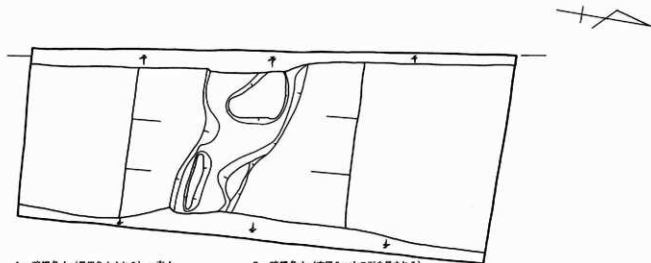


0 2m

第8図 第5号トレンチ

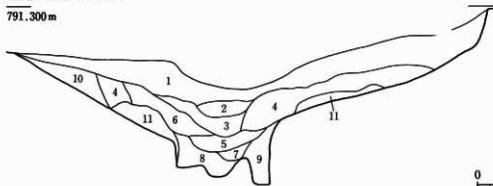


第9図 第6号トレンチ



- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1. 暗褐色土 (黒褐色土まじる) 一表土 | 7. 暗褐色土 (直径5cm大の石少量まじる) |
| 2. 暗褐色土 (直径2cm大の小石まじる) | 8. 暗褐色土 (直径3cm-5cm大の石少量まじる) |
| 3. 暗褐色土 (直径5cm大の石多くまじる) | 9. 暗褐色土 (直径5cm大の礫層) |
| 4. 黒褐色土 (暗褐色土少量まじる) | 10. 暗黄褐色土 (砂礫まじる) 一地山? |
| 5. 暗褐色土 (直径5cm大の石少量まじる、やや砂質) | 11. 黄色土 |
| 6. 暗褐色土 (黄色土ややまじる) | |

791.300m



第4章 ま と め

今回の調査においては堀〔A〕が出土したのみではあるが、この堀を含めた滝洞遺跡の性格を考えるうえで、その東に隣接している上の山遺跡をあわせて考えていく必要があると思われる。

【上の山遺跡Ⅰ】によると、『伊那温知集』の宮木の項に「弘治天正の頃郷士矢島勘六其子勘兵衛住居の後今以天白小城と云在」と記載されており、これによって上の山遺跡が天白古城と呼ばれるようになったと推測している。

上の山遺跡は辰野高校の校舎改築事業に先立って合計4回の調査が行われ、第2次調査において堀が2箇所より出土し、堀内より内耳土器他陶磁器等の遺物が出土している。第4次調査においては6基の竪穴建物址が出土し、内耳土器破片・すり鉢等の陶磁器が出土している他、刀子も出土している。これらの遺物は総じて15世紀中頃から16世紀前半に位置づけられている。

これらの遺跡調査の成果と、地字図によって天白古城の曲輪について考えてみると第3図のようになると考えられる。発掘調査の結果からは、堀〔C〕と〔B〕の東側の掘り込みと思われる部分が出土している。〔C〕は調査によってそのほとんどが検出され、内耳土器等が出土している。また〔B〕に関しては地字図によると北に延びる細長い畑の区画が見られるのでこの区画が堀のプランである可能性が高い。また、調査されていないものの堀〔D〕付近についても地字図で細長い区画が想定できそうなので、もう一本東西の堀があったと考えられる。このことにより上の山遺跡に存在するといわれる天白古城は、楡沢山麓にある扇状地よりとびだした小台地を堀によって区画した3つの曲輪を持つ城館跡ということができよう。

この曲輪の配置と遺構の出土状況を見ると、遺跡全体にカクランによる遺構の破壊という問題点があるものの、多くの竪穴建物址が〔Ⅰ〕の曲輪より検出されており、この曲輪が中心的な位置にあったと推定できる。次に〔Ⅱ〕の曲輪であるが、この曲輪の北東隅に腰曲輪と思われる遺構とともに、堀に直行する浅い溝状の遺構も出土している。さらに南側にも堀〔C〕の中程にやはり堀と直行するように〔Ⅱ〕の曲輪内より浅い溝状の遺構が出土しており、これらの溝は堀底道より〔Ⅱ〕の曲輪へ入るための道であった可能性がある。報告書によると実際に南の溝の底部は固く硬化していたという指摘もある。そうすると北東部の腰曲輪は虎口を防御するための施設として位置づけられよう。〔Ⅲ〕の曲輪については調査事例がないために状況は不明である。

このような曲輪の状況であるが、全体的に遺構自体には切り合い関係がなく、密度も薄いため比較的短期間の使用であった可能性が高い。これは、出土遺物からもいえる。

一方、滝洞遺跡第1次調査〔あ〕においては、住居址1基と土坑が3基報告されているが、これらはいずれも竪穴建物址と思われる。今回の調査においては竪穴建物址等は検出されておらず、滝洞遺跡においてはこの地域に遺構が集中しているものと推測される。第1次調査時の見解によると、この滝洞遺跡の遺物による年代は、16世紀前半から17世紀にかけてであるので、上の山遺

跡よりやや時代が下る。

さらに地字図をみると上の山遺跡の存在する地点が「滝洞口」であり、今回の調査区と同じ地名であり、第1次調査区が「久保田」であることを考えると、第1次調査区と第2次調査区の堀は同一時期のものではなく、むしろ堀〔A〕は、天白古城に関連する遺構ということができよう。

また、「久保田」地籍内に一辺約80mの方形状の部分があり、「要害」と呼ばれている。この地域はかつては土囲いがあったという言い伝えもあり、居館址であった可能性が高い。この要害はまだ調査経歴がなく、詳細は不明であるが滝洞遺跡第1次調査で検出された遺構がこの要害と関係があるとなると、おそらく天白古城が廃棄された後に居館として使用されたと思われる。しかし滝洞遺跡をも含めて考えていくと要害は非常に大規模な居館址となり、ここの居住者は大きな勢力を持っていたこととなる。このことは今後の調査成果を待って検討する必要があるだろう。

最後に今回の堀自体についてみると、堀〔A〕は滝洞川へつながっており、地層を観察すると非常に山からの押し出しが多い地域であったことがうかがわれる。さらに、最近まで大雨が降ると大水が出たという言い伝えもあることから、この堀は城館跡を水害から守るために作られた可能性もある。また、調査区からさらに西の山まで掘られている様子がみられることから、単に天白古城の防御のためだけと考えるには少し規模が大きいように感じられる。現状としてはこの堀の周辺に山城は確認されていないが、その存在を示唆しているようにも感じる。

滝洞遺跡の中世の様相はこのように上の山遺跡との関係から考えていかなくは解明できない部分が非常に多いが、まだまだ調査による成果が不十分であり不明な点が多い。そのため可能性のみを列挙する形となってしまったが、今後資料が蓄積されていくことによって滝洞遺跡の中世の様相も明らかとなっていくと思われる。

おわりに今回の調査に際してご協力いただきました長野県教育委員会及び長野県土地開発公社の皆さんに厚く御礼申し上げます。



遺跡全景



調査区透景 1



調査区遠景Ⅱ



調査区東部に延びる堀



滝洞川への合流地点



第1号トレンチ



第3号トレンチ



第5号トレンチ



第6号トレンチ



第7号トレンチ



第8号トレンチ

滝洞遺跡 II

辰野高等学校第2グラウンド造成に伴う発掘調査報告書

1996年3月29日 発行

発行 辰野町教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社

長野市柳原2133-5

026-244-0235
